

気軽にいつも「信州の山に行ってきます」と話していたが、信州とは長野県の事だとは、長野県の事を別称、愛称で信州という聞いてびっくりするやら、今までの間違いをどう訂正すればいいやら、なんともはや。オレが今まで信州と言ってきたのは、「信州の山に行ってきます」とその意味は、その場所は岐阜、長野、山梨の3県にまたがる日本アルプスの事なのだ。今さら「日本アルプスに行ってきます」とか、それぞれの山「北アルプスに行ってきます」「中央アルプスに行ってきます」「南アルプスに行ってきます」「八ヶ岳に行ってきます」と分けていうのもおかしいし、それでも言い改めなくてはいけないのかな・・・。廃藩置県前の昔の呼び名では、岐阜県の飛騨と美濃、長野県の信濃、山梨県の甲斐の4カ国のように。ところで信州という言葉は何なんでしょう。「なぜ信州と呼ぶ」という検索項目まであるので、不思議がっている人は多いのかもしれないが、市民権を得ている言葉、しっかりした単語のわりには意味がはっきりしないようだが、信州とは長野県の事、というのはオレの頭の中ではっきりした。

さて今回お邪魔したのは木曾の御岳山、<コレを書きながら、またまたびっくり、木曾は長野県だ、岐阜県とばかり思っていた、失礼しました>この辺りの山岳地帯は平地でも標高1000メートル前後、少し山に近づくと標高1500メートルぐらひはすぐに車で行ける。だから11月に入るとこの辺りの気候は晩秋である。晩秋の信州に来て一番好きなのがカラマツの黄葉だ。秋の陽の光を受けて黄金色（こんじきいろ）にも、金色の赤いものにも、渋いものにもその色を変える。風が吹けば木の葉が舞い散り、花吹雪ならぬ、黄金（こんじき）の吹雪だ。

カラマツを調べてみると。

本来中部山岳地帯を中心に自生していた。戦後、スギでは育ちにくい山岳地帯や、荒れ地、湿地に植林された。と読むと、なるほどいつも山に向かって車を走らせる林道の終点辺り、さあ登ろうかという登山道の入口近くに、カラマツがびっしり生えている、生い茂っている。生い茂ると言っても、スギやヒノキの植林帯とは違って、木の幹の線が細く、葉が茂って真っ暗になるようなことは無く、春は若葉の柔らかい色、夏は濃い緑、秋には黄金色（こんじきいろ）、冬には枯れ枝が天を刺す。

テントで寝た。この1週間急に冷え込んできたのに加えて、此処は大阪に比べると10度ぐらひは気温が低い。御神酒は結構いただいて、身体はほっこりしているが、朝になるとペットボトルが凍るかもと心配、でも凍りはしなかった、零度までは下がらなかった。朝起きると、太い幹の向こうに黄色い葉が陽に輝いているのは圧巻、というかくすぐったい感じというか、気持ちがいい。この気持ちのよさは、黄色い葉が陽の光を真正面から受け取って裏側をキラキラ輝かせているのが、葉を通り抜けて、透過している光が、オレの琴線を騒がすのかな。そんな黄色い色の中に時々赤がある。これは効きますね、まるでおいらの絵のようだ、この感性だ、この感覚だ、と葉の事ばかり言っているが、幹もいい。曲がった太い幹、ひっくり返った太い幹、ダテカンバの白、夏ツバキのモコモコ肌、赤松の赤っぽい太い幹、オレのお気に入りのブナの幹、これらがあるから葉っぱがきれいに見えるのだ。黄色、赤、黒、緑が点在する、お気に入りの色が点在する、と感激感動の二日間。

八合目まで来て、「後三十分は余裕があるぞ、約束の時間の二時に帰りつくには、まだ三十分は登れる、三十分登った所で小休止を取って戻ればいい」と思った。「左は頂上へ、右は三の池へ」と標識がある。御岳山には何度かの噴火でできたデコボコがいくつかの池を作ったらしい。「三の池は、一番大きな池」と書かれている。頂上まではまだ1時間以上かかりそうなので、ピークハントは諦めて、と言いますのは、頂上に立つのは嬉しいけれども頂上だけが山じゃない、こうして下の方をテクテク歩き、見渡し、地面を踏みしめ、土や岩の感触を楽しむのがいいのだ、とは最近のオレの感覚、登り方。それに今回は装備も心もとない、というのは、アイゼン、ピッケルがない、雪は中途半端

に積もっていて、日陰の斜面の所々で凍っている、アイゼンを付けるにはちょっと早い、ピッケルは欲しい、杖だけではスルリの時にそれこそ心もとない。「ならば三の池でも覗いてみるか」と歩きだした。ルートはしっかりわかるぐらいに付いているが、踏み跡が無い、このルートには昨日今日と人が入っていないようだ。獣の足跡を発見、熊を小さくしたようなかわいい足跡、コレは何の足跡かな、まるい処が5センチぐらいあった。

御岳山を訪れたのはもう何回目か、麓の人家を過ぎたあたりから、石でできた碑がズラリズラリと並びだす、黒い石の塊が並びだす。石の鳥居と石の塀の中に板状の石の碑が並んでいる。三合目、四合目、五合目とどんどん立派になって行くような気がするが、黒い異様な石の碑がぎっしりズラリズラリ並んでいる。何百年も昔から、御岳山は信仰の山として全国の人々から崇められ、人々が集い、石の碑を建て、祈ったんだろう。鳥居、霊神と書かれた碑、人物像、木造の祠、仏教の仏像もたくさんあり、神道（しんとう）も仏教も混在している。この季節には珍しく白装束の人は、山伏風の恰好だ。今回の山はキヌちゃんの企画で、「下から所々の宮さんや祠で止まって参拝しながらの一日を過ごしたい」ということだ。彼の数珠を見ると、そろばんの玉のようでもある、読んでいるお経は仏教のようでもある、日本の宗教は何でもありでおおらかでいい。

三の池にはなかなか到達せず三十分が過ぎた。「今日はここまで」と小休止。山の上は穏やかな気候、風もないと気付いたが本当に無風だ。こんな高い所で風が吹いていないのは珍しく、ありがたい。風は寒さを呼ぶし荷物が飛ぶと、いいことは無い「風が強いので早々に下ろう」というのがいつもの事。上を見上げると太陽の姿は見えるが青空は無い。雲もないがどんよりとした白い空、それでも足元には影ができて、顔に当たる太陽光線は心地よい。水平線を見渡せば乗鞍岳と木曾駒ヶ岳がすぐそこに見える。その上にかすかに白い雲がかかり、その白い雲が上へ上へ伸び、太陽の周りも白い雲がかかり、霞のように見える。要するに天体全部が白い霞に覆われた天気、それでも太陽はその霞を通して輝いている。雪の白、足元に生い茂るハイマツの緑はいつ見てもいい、きれいだ、爽やかだ。

先ほど、石ゴロゴロの谷を渡る時カメラを落としかけた。オレの山スタイルは、背にリュック、コレは山登りのどなたも同じスタイル。今日は何時間かを登って下るだけなので、防寒具、ヤッケ、食糧、水、ヘッドランプぐらいしかリュックに入れてない。人と違うのはリュックとは別に腰にウエストポーチを腹側に付けて歩いている。そのウエストポーチの中身は長年の経験で色々入っている。ペットボトル、一眼レフカメラ、箸、スプーン、ナイフ、リップクリーム、ハブラシ、ティッシュ、笛、ライト、ライター、薬とこまごま入って、何処に何が入っているのか分かっていない。歩行中も、荷をおろしてテントの中で、小屋の中でもすぐに小物が取り出せる。歩きながらカメラを写してはポーチに仕舞い、又取り出して写すと立ち止まらずに歩ける。谷を渡る時ポーチのジッパーを締め忘れていた。普通に二本足で歩く所では物はめったに落ちないが、石ゴロゴロの谷渡り、慎重に前かがみで進んでいると、カメラがごろり「あああ」またごろり、下まで落ちると取りには行けない、まずいと思ったら次のゴロリで止まった、ヤレヤレだ。よく見ればゴロリの場所から下はちょっと深い谷、向こうから回れば行けるか行けないかやばい所である。そんな所にカメラを落とすとカメラが駄目になるか、オレが足を取られて落ちるか、と考えるとぞっとする。

久しぶりの山のとっぺん近く、穏やか処に座り、向こうの山を見て、下の人家、雪、ハイマツを見て、「満足じゃ！」

画像は鉛筆スケッチをパソコンに取り込んで、パソコンで色を入れてみた。

は占いでは・・・」思いながらも聞きいった。飛鳥、平城という時代、何度かの遷都、たくさんの墳墓造り、都を結ぶ道路、動線等は風水を調べ利用して決めていったのかな。当時の風水やら陰陽道やらを操る人なり家柄なりがあって、彼ら、またその集団が「こうである」「こうしなさい」「こうするように天の声が聞こえる」などと言っていたのかな。国が何かを決める、何かを作る、外国と戦争する、仲良くするというような事を、誰が、何者がどう決めているのか、現代の事も昔のこともわからない、コレは分からない方がいい、わかろうとすれば色々調べて、話して、喧嘩してと、どうもオレの人生にとって碌な事にはなりそうにない。

“かんちゃん”は60歳代から大学の聴講生として日本の古代史を研究している「私はたいしたことはない、たいしたことは知らない、講義で聞いた、聞きかじりを話しているだけ、少し前の講義の内容は忘れてる、単に耳に残っている事だけを話しているのですが・・・」と謙遜交じりに多弁だ。

wikipedia を読むと。

中国では風水は思想、学問のようだ。都市、住居、建物、墓などの位置の吉凶禍福を決定するのに用いられてきた、気の流れを物の位置で制御する思想。

古代の日本では、風水が完成するまでの一部が陰陽道や家相として取り入れられ独自の発展をした。

日本の風水ブーム（1990年頃）は風水とは無関係の、家相術や九星気学のアレンジで、意味のないファッション、風水師などと名乗る人物の営利手段に利用された、と手厳しい。

今の時代でも国の政（祭りごと）に占いを利用しているような処が、国があるだろうか。いや無いとは限らない、ひょっとしたらあるかも知れない。政（祭りごと）と言っても、今日明日に決定を下さなければいけないものから、10年先、20年先、100年先の話を決めることもある、そんな時は占いでもしないと決められませんか真顔で思っている人たちがいるような気がする、そのような先々の話は、丁半でも占いでも使わないと結論が出ないかもね。

100年先・・・？と真剣に考えてみても、空想してみても、何も思い浮かばない。多分人類はいるだろう、日本もあるだろうが、どのように変わっているのやら、というより思いもつかない大変な、ケタイな方向に変わっていると思う。友人のいい橋先生が「石器時代は1万年単位で徐々に人の生活が変わったけれど、21世紀になって、自分の生きたこの60年を振り返って、衣食住だけを取っても大変な変わりよう、ライフライン lifeline やらインフラ infrastructure やらこれまた大変な変わりよう」というが、オレも正に同感。世の中の色々がこんなに急速に、こんなに形を変えて変革していく様は「おかしい、よくない、間違っている」といつも思う。オレは絵を描いているが、画材屋に並んでいる商品が変わってきている。「絵の材料、画材なんてものは50年100年単位で変わるな」というのは、おかしいですかね。

オレも「科学万能、技術万能、理論万能」なんて事を忘れて、「自然万能」をもっと取り入れないとあかんぞ。とはいえオレは、占いやら、血液型はちょっと・・・ね。

0123 野沢菜を漬ける 131112

御岳山の麓、野菜を売っている店で、野沢菜を買った。これが野沢菜かと漬け物になった姿しか知らないオレには知らない菜っ葉だ。野菜食いのオレ、車で旅に行ったときには袋いっぱい買う。この時も野沢菜を含めて、芋やら蕪、リンゴと1500円也を箱いっぱい買った。

“野沢菜漬け”という項目を調べてみた。

今から考えると、信州のような寒冷地、一週間前そこに居た時は朝夕の最低気温が零度近い所だった。そんな所で育て、そんな所で売られていて、そこでこそ上手に漬物に漬けられる野菜を、温暖な大阪の地に持ち帰り、信州と同じ方法で漬けたのだから失敗するのは目に見えているのだが、悲しいかなそんな予想をする考えもなかったというか、漬物なんて作業に日々馴染んでないトウシロウの過ちというか、考えが足りないぞというか・・・というわけで失敗した。

野沢菜を洗う。普通は井戸や川や湧水で洗うそうだが、野沢菜は湯で洗うと漬物が出来上がった時に旨くなるとかで、野沢菜を漬けるシーズンになると、各地の温泉元がこの時だけ野沢菜を洗う人たちの為に温泉の湯を提供するのだそう。暖かい湯で野沢菜を洗うと、漬物になった時によりうまくなるし、洗う人たちも寒さ知らず冷たさ知らずとい事づくめだそう。

「よし」とやかに湯を沸かし、バケツに水を半分入れ、ぬるい湯を作りそこに野沢菜を入れて揉み洗い。泥が付いている、二流品の野沢菜は葉が半分黄色くなっている、泥や黄色くなった葉を削ぎ落とし紙を敷いて野沢菜の天日干し。野沢菜1キロに対して、醤油0.3リットル砂糖300グラムと書いてあるのでその三つをバケツに入れ石の重しを置いた。かの野沢菜、軸の太さは指くらいでしっかり硬い、これがあの緑色をした箸の細さのシャキシャキの漬け物になるのか、出来あがったらバリバリ食うぞと後の楽しみを思って作業を続けた。翌日見たが同じ状態、その翌日も、そのまた翌日も、水は上がってこない。これは失敗、腐るやも、以前の白菜と同じ運命かと一週間目にそれが的中、当たっていた、腐ってきた。上の方がヌルヌルのズルズル、下をめくるとそこもヌルヌルのズルズル。「ああ～やっちゃった」とバケツを土の所に持ち出しひっ繰り返して埋めた。

キヌちゃんからおしかりを受けた

野沢菜の醤油ズケの失敗原因として考えられること。

1. 温度、漬けものは低温でないとカビ生える、腐る。室内に放置しなかったですか。我が家は塩漬けにして屋外の北端の日の当たらない雨のかからない所に置いています。今日見たがどうもなっていません。温度が高いとカビや腐敗菌が活発に活動するので、それらが繁殖しないためには、塩分を濃くする、酢を入れる、焼酎を入れるなど工夫がひつようです。いわゆる、塩づけ、酢づけ、酒漬けです。
2. 冷蔵庫に入れるなど低温だと、塩、酢がすくなくても漬けられます。
3. 落とし蓋を載せて重しをすることも大切。水が1、2日で上がってこないとかビ、細菌が繁殖します。
4. 砂糖をいれると細菌が繁殖しやすい。砂糖を入れるなら冷蔵が必要。

次回作る時は、塩漬けにしてタカノツメ入れて、重しをして、寒い所に1週間以上置く。1か月でも3か月でも何日置いてもだいじょうぶです。暖かいところでは塩が多く要る、寒いところでは塩は少なくていい。もし醤油漬けにするなら、塩づけ後、水が上がってから、試しに少しだけ醤油と酢と昆布とみりん（砂糖？）に漬けてみてはどうでしょう。

いかがですか、皆様も“漬けもん”に挑戦されては。

図版は最近描いた水彩画。買ってください、安いはず。A5ぐらいの大きさ。

0124 土偶 161112

突然娘が「暇？」と聞く、「miho museum に連れて行って・・・」話を聞いてみると土偶展をやっているという。もう20年も前に「いい美術館が信楽の近所に在るから・・・」と家族からの誘いに行ったことがある。いい建物、管理、掃除が行き届いている、これは公の美術館では無くて宗教法人か何かかな、お金がかかり過ぎて立派で象徴的、建物も敷地も景観もすごいと思った。のんびり行こうぜと枚方、宇治、信楽と車を走らせた。信楽からは晩秋の里山が黄色

く色付いて、シカでもぴょいと飛び出して来そうな風景、ゴルフ場がたくさんあってきれいに整備されている。二十年前とはいえ2度目なので、そう言えばこんな風景の所だったなと思い出しながら、miho museumに到着した。

何日か前に、知り合いの彫刻家の話が出た。「あの人の作品は素晴らしい、全部が好きだ」という人をしり目に「オレは好きで無い、土偶のような素朴な奴もあるが、ほとんどが多少技巧が、上手さが勝さりすぎて、彼の化粧の為の化粧というか、うまく、よく見せたいという欲というか、そんな俗っぽい物がちらつくので、彼の作品は嫌いとはまではないが、好きではない」なんて話をしていた所に今日の土偶展。まずはっきり言って大感激。ほとんど他人の作品を見ないオレ、連れられて来たとは言え、よくもこんなにも集めたり、よくもオレの好きな奴らばかりを集めたり、よくもオレを此処に連れてきてくれたものかと・・・。

紀元前 2000 年 3000 年という記述、中部地方より北の方の土偶が多い、土偶ばかりを作っていた専門の人がいたのか、幾人ものおっちゃんおばちゃんの作なのか、家の中の飾りものなのか、祭りや祈りに使った物なのかまだまだ解かっていないようだが、関西に住んで明日香の発掘ニュースばかりに気を取られているオレにとって、石器、縄文時代の古代人は如何にも新鮮、そして知らないことが多すぎる。15 年ぐらい前北海道東北をうろうろした時、東北考古学研究所という名だったと思うが“神の手”と崇められ、教科書までを塗り替えたおっさんが、実は自分で遺物を埋めていたという大惨事があった直後で、日本の石器、縄文時代の考古学がてんやわんやだったと思われる頃、“ストーンサークル” “人の死に対する埋葬祈り悲しみのマインド”なんて「あれは全部ウソ」と極端に騒がれていた。発見されたばかりのあの有名な三内丸山遺跡に寄ってみようと訪ねたら、「三内はもっと向こう、此処は違うが、ま、見ていったら」と学者先生に案内されて、色々教えてもらった嬉しい思い出。「ここが鹿等を取る為の罠の後、こちらが住居の跡」と説明を聞いて「住居の傍に罠・・・？」と納得顔で言うと「違う違う、此処と此処では何百年の時間差がある、それは土を調べたらわかる、人の手で掘ったり家を建てたりした跡が、痕跡が時代を教えてくれる」なんだそうか、なるほどなと思ったが、何千年前という時期に、ここら辺りに人がいて、同じように生きて住んで食べて、嬉しがったり悲しがったりの生活があったとは不思議なような当たり前なような嬉しいような。「あの人は、今の我々とは違う人種だ」と聞かされて、そう言えば当時の人の復元された顔は、ヨーロッパ人に近い美男美女、我々東洋人ののっぺり顔とは違うなあと、こんなことで淋しく悲しくなると何とする。

一番のお気に入り、手のひらサイズで逆三角形の板状の土、縦に横にへたくそに柵目が刻んであり、上に丸い顔と言っても目があるだけの素朴そのもの、それと驚いたのは縄文式土器のあの大きさ、オレは前から 30 センチぐらいと思いきりこんでいたが 70 センチ 80 センチぐらいの高さ大きさ、しかもほとんど原形を保っているとこれもついでに感激。

「あ、石田有作氏、今日から、滋賀県立近代美術館で個展をやっているのでは」と思いだして帰途に寄った。相変わらず素晴らしい白磁作品だった。この話はまたの機会に。

0125 土偶Ⅱ 191112

縄文という時代が千年単位で在り、〇〇頃に〇〇があり、〇〇の頃に〇〇があったなどと言われても、時という概念がこの場合大雑把すぎて、オレの一生、彼の一生、過去の人的一生と、十把一絡げには考えられない、人さまの事をそう簡単には考えられない、千年前、二千年前と一言ですませてしまうが、一代前の親の時代というだけで分からないことが、二代三代前、親の親、その親の時代となると益々分からない、ましてもっとずっと昔、何千年前となると、宇宙の彼方のような話か、顕微鏡の中の微細な世界の話か、もう、分かる分からないの範疇を超えてしまう。オレ自身、自身の一生を、自身が過ごしてきた一つ一つを懐かしみ、思い出し、それぞれの喜怒哀楽を、揺れ動きを、陶醉

を、その盛り上がり、あの鬱陶しさを、述懐する、その一時に耽る、というぐらいの簡単な設定想定で土偶を作っていた縄文人と話してみた。フィクションでいい、絵空事でいい、厚かましくもオレの心象風景を織り交ぜて、勝手な想いで書いてみた。

水がチロチロ流れている処、峠より少し来た所、家族や仲間が知らない処に彼の土偶創りの場所があった。湧き出た水はいつも枯れることは無く、向こうの山こっちの山と木が生い茂っている。東北地方の少し標高が高い場所、冬がま近い晩秋の頃、現代なら熊やその他の獣たちが喜んで食べる木の実が豊富に採れる、鳥たちが啄ばむ稗や粟が豊富に採れる、鹿、猪、猿が豊富に獲れる、川や池では魚、貝が豊富に獲れる、飢餓や天変地異もない。

いつも台にしている大きな石がある、丸みを帯びた平らな石の上に、ひとすくいふたすくい土を乗せ、水を垂らし、棒で敲き、手で捏ねる。土は此処の土でいい、此処の土がいい。この土は石も砂も少なく扱いやすい。ひと塊となった土を石の上に押し付け、手で平らに伸ばし、指で押さえ、木の枝で敲き、指、手のひら、棒を使って土を三角形の板にしてゆく。イメージは膨らんでくる、今回は自身の姿、自分が原に立って空を見て何も考えていない姿を作ろう。逆三角形の両端が手で下が足、これに顔を付ければいい。顔用の丸い土を指で丸め、指で押さえつけ、指で擦り、逆三角形の胴体に押さえてくっつけた。胴体と顔の両方に少し水を付けてくっつけた。顔にはポコリと二つの目の形を付けた。目の形を付けるのに木の枝を折り曲げ切り取り石に擦りつけて、なかなかうまい具合の目の形を作った、その棒を土に押し付けた、なかなかいい目ができ、目が入ると生き生きする。逆三角形の胴体には布で作った服を着せよう。服はどうして作るのかというと、細長い草を叩いて解して、細い糸のような繊維を取り出し、縦に横にと順繰りに織って作った布だ。獣の革よりも、粋でシックでお洒落だ。オレの姿の逆三角形の胴体に棒で、縦の線、横の線を入れてみた、服が着せられた、お洒落だ、オレの立ち姿ができた、土偶の元ができた、目がパッチリ堂々たる立ち姿、オレの分身ができた。土偶たちが手の指と足の指の数ぐらいができたなら焼こう。本当は20個ぐらいできたらと言いたいのだが、縄文人に数の概念があったか無かったか、恐らく無いだろうね。粘土の水分が無くなって乾ききったら、土に穴を掘って、枯れ草、木の枝、幹、土偶を入れて火を付けて土をかぶせる、明日になれば土偶が出来上がる。オレの姿が出来上がる。

その時代は文字がない、言葉はあるがそのしゃべり言葉は、食う、寝る、行く、帰る・・・とこれは絶対に必要な言葉だろうな、そしてその次に、食うには、食べ物の名前が必要だろうな、肉があり魚があり豆があり、肉には、鹿があり、鼠があり、縄文人のしゃべり言葉は、何処までがアリで何処からはナシなのだろうね。たとえば今の人間が日常使う単語はいくつ位で、普段使わないが知っているとか、教育やら報道やらの情報が入ってきてどんどん単語の数が膨れているだろうけど、単語の数は分からないので学者先生に任せよう。

彼は「猿を狩った」「猿を食った」「AとBの3人で斃した」「お前らにはやらないぞ」なんてことぐらいは言っていたかな。

画像は近作の部分。オレの絵、土偶の方がいいのでは・・・。

0126 最近読んでいる本 251112

丸山健二著「猿の詩集」の2.3行

万物が神仏のかげろいなどではないと断言できても、広大な宇宙を支える原理の全てをつかさどっている偉大な造物主の存在を否定しきれない、そしてその奇跡の力が人類に劇的に作用する日を待つ、弱志の徒の典型としての、じつにわかり易く、じつに情けない私を意識せずにはいられなかった。

このような文章が延々と続く。オレの頭の中、言葉が脳をかすめて、右から左へスイスイ流れていく、脳の裏にはささりもしない。この快さが、この楽しさがいい。「右から左へスイスイということは、余韻も残って無い、言いたいことも分かって無い、作者の心象風景も見え無い、と無い無いづくしでは・・・」「かもしれない・・・」

有名な荘子の「胡蝶の夢」訳者が不明でゴメン。

うらうらとした春の日、荘子はうつらうつらと夢を見ていた。ふと気付くと自分がふらふらと蝶になっている。空を飛んで花を眺めて遊んでいる。荘子は夢で胡蝶になった。が、夢の中では胡蝶が荘子になってヒラヒラ飛んでいる。夢の中の胡蝶が覚めて、荘子は荘子に戻った。荘子が目を覚ましたのではなくて、胡蝶が目を覚まし、次に荘子が目覚めた。

というだけの話だけれども、自分と自分以外の物やら人やらの関わり合いが、おもしろい、おかしい、傑作な事だと思ってしまう。もっと言えば、このような事は、オレにはいつもある事、日常茶飯事の事、一つ一つを書き分けて解明して理解しようなんてする方がおかしい。夢の中でも現実でも、蝶になれたら素晴らしいのではないのかな。

此処からはオレの絵の話。

“わたしはわたし”という題名の絵を描いている、もう何枚も描いている。これは“顔”をテーマにした絵で、顔、つまり自分の顔であり、君の顔であり、あなたの顔なのです。たくさん描いて、今この頃思うことは、「何が何やらわからない、説明できない、ともかく顔なのです」と言うようなことになってきています。その顔の絵もどんどん抽象化してきて「そうですか説明を聞けばこれが目ですか、これが全部顔ですか」「なるほどこの線が、あなたのいう処の線、鼻筋とでもいう処ですね」と何が何やら説明する方も整然と論理的に合理的にできなくなってきて、分からなくなってきているが、絵を描いている本人は、創作している画家は、ボ～っとしているオレは、至極真面目に「顔のつもりで筆を入れている」「これは自分の、君の、あなたの肖像画、顔の絵なのだ」といつている。以前は、「これは顔の形の形象化の絵です。形象文字をご存知でしょう、あれです」「馬という漢字、初めに馬の絵があって、四本足で立っている姿を戯画風に、漫画風に描いた絵が次の段階で簡略化され、その次の段階でもっと漢字に近づいて、今の馬という漢字ができた事はご存知と思う」「オレの“わたしはわたし”という題名の絵は顔の絵で、オレ自身の形象表現、目はこう、鼻はこう、口はこう、と徐々にこんな形に出来あがった。オレの中の顔に対する形象化」と説明してきました。最近では“わたしはわたし”という絵の題名、顔の絵ですよというテーマを借りて、顔の絵ということを利用して、化学でいう処の触媒、顔の絵ですよということは、心の支えであるのだけれど、このテーマこの題材がないと、根本的に創作過程の意味が崩れてしまう。今はただ顔の絵ですよというこれを元に、礎に、“わたしはわたし”という心象風景を描いている。その線が、その点が絶対になってきて、自然と自分なりにそうなってきている。手が動く、筆が走る。

次回の展覧会は“わたしはわたし”を中心に出品したいと思っています。

図版は 2年前の“わたしはわたし”の絵。

0127 晩秋の鈴鹿山脈 271112

11月最後の連休、ラジオのニュースで京都方面への交通機関が紅葉見物の行楽客で満員、京都方面に出かける方は公共交通機関を利用してください、また車を利用の方は京都周辺の駐車場に車を止め、そこから電車かバスをご利用くださいなどとアナウンスをしていた。今回の目的地は滋賀県湖東方面、八日市ICから三重県に抜けた所に在る山だ、登山だ。新しい高速道路ができ、混んでいる京都を通らずに迂回し渋滞もなく登山口に着いたのが2時ごろ。3週間前に訪れた御嶽山の麓と比べると、気温が少し低い。晩秋の山は日々冬の訪れを待っているようで、木々の紅葉もどんどん進み、枯れ葉の舞い散る様が目立ち、枯れ枝ばかりが天を突き、木枯らしとまではいかないけれど風が吹き、毛

糸の帽子、毛糸の手袋が暖かい。まだまだ昼間の時間帯なのに夕方を感じさせるような風と寒さ、此処は山あいの谷なのかなんとなく薄暗く、遠くの所々で陽の当たる場所だけが、その山の一部だけが、その辺りの木の葉だけが明るく輝いている。

5時までに食事の用意をしなければ、4時半までに着かなければと、久しぶりのテントの入った重いリュックを背負い歩き始めた。50歳代までは重いリュックを背負って、何時間もかけ上まで登れたが、今は2時間3時間で音を上げ弱音を吐いてしまう。それ以上続けると翌日の行動に支障が出るというように体力の衰えは歴然。峠を越えて下った所に川が在る。水のきれいな川だというより溪谷だ、そのまま掬って飲めそうな色合いのきれいな水だ。落ち葉が敷き詰められた平らな所でテントを張り、食事の用意。4人の仲間は普段あまりお酒を飲まないけれども、「日本酒がいい、日本酒が飲みたい、純米酒を探してきてくれ」と盛んに純米酒を強調する。酒飲みのおレ、純米とか吟醸とか言葉は知っているけれど、それならば何処のどの銘柄が好い旨いは知らない。酒飲みは概して味にこだわらず、酒なら何でもいい、1杯目だけがうまければ後は少々悪い酒でも判りはしないと思っているし常々そう言っているが、時々呑み助の中にも「酒は〇〇、ウイスキーは〇〇・・・」と銘柄を言い能書きの多い人がいる。湯が沸き始めた頃から持参の焼酎を湯割りにして飲み始めた。「それじゃ我々も・・・」とみなさん買ってきた純米酒を飲み始めた。カラシ蓮根を持ってきてくれた方がいて一口いただくと是はなかなか旨い、熊本土産の珍味だそう。それにメザシ、サラミソーセージとチーズと酒の肴がどんどん出てきて、みなさんチゲ鍋をつつついているのにオレはアテばかりを載っていた。とはいえ飲む酒の量が減った今は何杯かで腹も膨れ、いい気持ちとなった。

あくる日2時間半ぐらいで目指す頂上に立った。鈴鹿の山は低いがてっぺんには木が少なく、廻りをグルリと見渡せる、琵琶湖も伊勢湾も見える、白山、御嶽、中央アルプス、北アルプスまで微かに見える。「富士山は見えないかなあ・・・」

石灰岩でできた鈴鹿の山、黄土色の土、白色の石、緑色の草と配置よく並んでいる様は、上等の庭園を想わせる綺麗さ、鈴鹿の魅力はこの色の配置の綺麗さなのかな。

崖を下りながら「恐いなあ、気持ちが悪いなあ、下はどうなっているのだ・・・」「右に回って、左の木を掴んで・・・」と叱咤激励の声が飛ぶが、右がどちらで左があちらなのか、高所恐怖症という症状は理性も体力も奪ってしまう。ムズと掴む木の枝、木の幹、木の根っこ、これがもし枯れていたらポキリと折れてはひとたまりも無く滑落、慎重に3点確保で、掴んだ木の枝やら幹やら根っこを大丈夫かと確認して、スイスイとまではいかないが、ヒョロリヒョロリと下った。

すこし前、隣家が新築工事の折「アンテナが食み出していますので・・・」と撤去するように言われ、鋸を持って2階の窓から屋根に登った。たかだか5.6メートルの高さだとはいえ、足がすくむ怖いと屋根の棟の瓦の上に跨って座り、恰好が悪いだろうな、へっぴり腰に見えるだろうな、と思いつつ、座ったままで壁（いざ）り進む。アンテナのある端っこからは地面が見え下半身がスーッとすの耐えて、鋸を取りだしてアンテナの棒を根元から切った。簡単に切れたから良かったものの、なかなか切れなかったら無き面を見せる所だった。そのまま鋸を持って窓まで後ろ向きに帰ったが、腰やら膝やらが固まり痺れ、オレの高所恐怖症は困ったものだとの再確認。屋根の上も崖の上も嫌いである。



前回の“晩秋の鈴鹿山脈”の続きのようなものですが、あの時は“根の平峠”という処を通りました。登山口付近の標識の説明板に干草街道に通じる、滋賀県への物資輸送の道だったという。山を歩いていて峠、乗り越しという言葉がよく出てきます。

峠と乗り越しは同じような意味らしいが、この“根の平峠”は、滋賀と三重を結ぶルートで人も物資も運ばれていたようで、往来する人もたくさんいて「もうすぐ峠だ、もうすぐだ、がんばれ、がんばれ・・・」なんて事を言いながら、ふうふう登った道のようなのです。今は山を登る登山客しか通らない道になってしまいましたが、道路ができて車が走って鉄道ができる頃までは、日本全国にこんな険しい道を、荷を担いで、牛や馬を引っ張って、女子供も一緒になって歩いていた様子が目に浮かびます。

我々は普通に登山道として歩いていますが、これが昔の生活道、人や物を運ぶのに必要な道だったと思うと、よくもこんな危険な処をワラジひとつで歩いたものだと感心する。雨や風で崖が崩れ道が埋まってしまったり、道そのものが崖下に落ちてしまったり、大木が倒れて道を塞いだりと、登山道を歩いているとそんな事は始終あること、よくあることで、その都度地元の人々が現地に入って修繕補修をいていたのだろう。今度のやつは修繕補修が無理だと思われるような災害の時にはまた別の処に道を作ったりもしたはずだ。巻き道とか、新道とかいう言葉もよく出てくる。山を歩きながら、何と上手いこと道を作ったものだと感心するが、出発点があつて目的地があつて、曲がりくねっても安全でしかも早く、そんなルートを昔の人は探したのだろう。山をよく知っている人、木の世話をする人、獣を獲る人、炭を焼く人、そういう山に関わったたくさんの人がいて、今よりもずっと昔の人は山に関わって生きていたのかもしれない。

何を運んでいたのかな。嫁入りに里帰り、出稼ぎに行商、食料、衣類、薬・・・。

東海道や中山道と名のある街道には一定の距離に宿場町があつて、旅人も牛馬も休めたが、山の中の道、小屋さえ無い処、人の気配もない処、野宿もかなわないし、よほど覚悟をして踏み入らないと慣れない者には大変な道だったんだろう。

根の平峠のように飲み水の潤沢な処は水筒が要らないだろうが、ほかの所では竹筒が当時の水筒だったのかな。外国映画では豚や羊の胃袋に水を入れてありますね。

飯というのか弁当はどうしていたのかな。おにぎり、干し飯、芋・・・。

ある講演で、10歳ぐらい年上の演者が、昭和30年ぐらいの学生時代、握り飯を載せて感激した話をしながら泣いていた。その演者が言うには、昭和30年過ぎてからやっと飢えが無くなった、それまでは日本は飢餓に苦しんでいた、誰もが腹を空かせていた。今のように食いものが豊富に無く、特にその先生は家が貧しく、仕送りが少なく、当時いつも腹を空かせていたらしい。腹を空かせた彼に同情した下宿のおばさんだったかが、暖かい大きなおにぎりを彼にくれたらしい。日本中で飢餓感が無くなったのは昭和30年が過ぎてから、ついこの間だと話しながら、その先生は声を詰まらせ、握り飯の旨かったこと、ありがたかったことを話していた。

話は飛んだけれども、その以前の弁当の中身は何だったのだろう。おにぎり、干し飯と簡単にいうけれども、当時の庶民がそう簡単に米の飯が食えたのだろうか。今のように栄養満点、しかも旨い食べ物がそうあるわけは無く、穀物を腹いっぱい食わないと活発に動きもできない。想像してみるに、玄米と稗（ひえ）とか粟（あわ）とかの雑穀を炊いたもの、芋等と漬け物をがつつ食っていたのではないかな。

オレの個人的な話だけれど、よく「燃費が悪いね」と山仲間から笑われるのは、「腹が減っては戦ができない」ではないけれども、いつも何かを食っている、休憩の都度、何かを食っていると笑われる。みなさん食わなくても大丈夫なのかね、腹が減らないのかね、オレは腹が減ると急に動けなくなる、エンジンが停止するので、燃費が悪いと顰蹙（ひんしゆく）を買い笑われる。

とまあ取り留めもない話になってしまいましたが、いろんな処を歩いてみて、昔の人の、名も無き人の足跡、痕跡に接するのも楽しいかぎりです。

図版は崖をコワゴワ降りている様です。さすがにこんな場所は、昔の道には無い。